ぶっそうげの花ゆれて

沖縄県退職教職員の会婦人部編

ドメス出版

沖縄戦と女教師

沖縄県退職教職員の会婦人部編

ぶっそうげの花ゆれて

沖縄戦と女教師

トメス出版

ぶっそうげの花ゆれて——沖縄戦と女教師

1984年5月31日　第1刷発行

定価 2200円

編　者　沖縄県退職教職員の会婦人部©

発行者　今田　喬士

発行所　株式会社 ドメス出版

東京都豊島区駒込1—3—15
振替 東京 8-48766
電話 03-944-5651

印刷所　株式会社 太平印刷社

製本／明光社　装幀／入野正男
落丁・乱丁はおとりかえいたします

すいせんのことば

沖縄教職員会初代会長（元県知事）　屋良朝苗

私が教職員会在任中、絶対平和を希求してやまぬ教師集団として、ぜひやっておきたかった課題は、教職員の貴重な戦争体験記の編集であった。しかし、念願だおれに終わり実現しなかったことは残念であった。そのことは、いまもって心残りである。

ところが、このたび退職教職員の会婦人部が、この問題を組織的にとりあげて、多くのかたがたの戦争体験を、『ぶっそうげの花ゆれて』と題するご本に集録して発行されることになった。ありがたいご企画に敬意を表し、感謝申しあげたい。

目次を拝見しただけでも、ひしひしと胸迫る思いがする。

待望のご本が、広く人びとに愛読され、よりいっそう平和と民主教育に大きく貢献することを念願し、かつ期待して推薦のことばとする。

一九八四年五月一五日

発刊のことば——教え子を再び戦場に送るな

沖縄県退職教職員の会婦人部部長　平敷（へしき）りつ子

この世の中で残虐非道の最たるもの、それは戦争以外にはないでしょう。

去る太平洋戦争では沖縄は祖国防衛の最前線基地として使われ、唯一の戦場となり、戦争末期には集団自決、日本軍による住民虐殺という人間としての想像を絶する阿修羅のような状況さえおこり、二十余万人の県民が死に、山河は焦土と化しました。

戦前、戦中の教育にたずさわってきた私たち退職教師は、その戦争への協力者であると言っても過言ではないと思います。戦前の国策としての軍国主義教育を何の疑念をはさむことなくあらゆる教科で教えてきたのですから。敗戦という厳しい現実に立たされ、それが誤っていたことを悟った時はすでにおそかった。生命の軽さを教えられた多くの教え子たちはもう帰らぬ人となり、そのことが永久に消えることのない私たちの心の傷痕となっていまなおうずき続けているのです。

それなのに「核抜き本土なみ復帰」の叫びもむなしく、この小さい島に日本にある米軍基地の五三%がおかれ、キセンバルやその他の演習地では日常茶飯事のように実弾射撃訓練やその他の演習が行なわれています。嘉手納基地は日米両政府の予算で一層強化されつつあります。たびかさなる演習による山火事でついに水源涵養林まで焼かれ、水不足で悩む県民に大きな不安を与えています。それだけでなく安波（あは）ダム、新川ダムの完成を機に「その水面を渡河訓練の演習に使わしてくれ」との米軍の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

申し入れもあるやに聞きます。

さらに一月五日の新聞報道によりますと、二月に行なわれる米韓軍事演習に嘉手納基地からもF15イーグル戦闘機を主力とする、RF4偵察機等々、戦術戦闘航空団が参加すると報じています。いま沖縄はまさに戦時中さながらです。日本を不沈空母とよび、日米運命共同体等々の新聞報道と合わせ考えた時、戦争の足音は耳もとに聞こえ、身の毛のよだつ思いがします。

核兵器時代の現在、もし再び戦争になるならば、それこそ地球の破滅、人類滅亡の時代となるでしょう。人間の手によって始められる戦争ならば、人間の手によって未然に防ぐことも可能でありましょう。ならばこの地球上に住む生きとし生ける者みなが身命を賭して戦争を阻むことは人類存続のための唯一の任務であると思います。また戦前、戦中の教育を施してきたおたがい退職教師は、自らの罪を償う意味でも、とくに子を産み育ててきた退職女教師は女の立場からも、その責任の重大さを感ぜずにはおられません。

平和憲法は空洞化し、戦争体験者は年々その数が少なくなり、国民の過半数、教師の多くが戦争を知らない時代になって戦争体験も風化しつつあります。このような中にあって「教え子を再び戦場に送るな」のスローガンを長年掲げ続けてきた私たち退職女教師には今こそ、その意味をかみしめ、平和実現への努力が求められているといえます。

全国退婦教結成以来、冒頭の目標に掲げてきた私たちの平和運動の一環として、私たちが元気なうちにぜひ語り継がなければという会員の熱い思いが湧き上がり、昨年五月の第九回県退職教師の会婦人部総会で体験記発刊を決定しました。その後たくさんの原稿が寄せられました。それは思い出すさ

え、また語ることさえ、悲しくつらいことだと、最初執筆を拒んでおられた退職教師である妻や母親たちが「平和実現」のためならばと思い切って寄せられた血涙の叫びであり、訴えであります。

しかしこの数は沖縄戦体験者の氷山の一角です。

原稿を寄せてくださった会員皆様の御厚情を無にしないよう、さらに戦争の犠牲になられた多くの方々の死をむだにしないよう、この記録を一人でも多くの方に読んでいただき、世界の恒久平和を生み出す一助になればとの願いをこめて発刊のことばといたします。

最後にこの記録編集に当って御尽力くださった方々に心からの感謝の意を表します。

一九八四年一月七日記

はじめに——編集を終えて

編集委員長　徳田　浜（きよ）

生霊は三三年経つと神様になるといわれ、その後は赤飯を炊いて祀るともいわれています。沖縄戦で亡くなった人たちは神様になっているでしょうか。いまだに地に埋っている人たち（遺骨発掘作業はこれから一四、五年はかかる）は神様になり得ないのではないかと心配しています。戦後四〇年にもなろうとするのに、沖縄では戦争はいまだに終わっていないのです。

国内で唯一の戦場となった沖縄県での戦いは、島々の周囲はアメリカ、イギリスの艦隊に取り囲ま

れ艦砲射撃はひっきりなし、空からはB29やら戦闘機やらでの射撃、その中での右往左往、そこへの敵軍上陸。友軍からでさえ見殺しにされる女、子ども、年寄り。あんなむごい戦争、思い出すことさえ恐しいのですから、何とか忘れて、今日を精いっぱい生きればよいと努めてきたわけですが、世界の状勢もさることながら、日本国内の武装化といい、ことに沖縄での自衛隊がアメリカ軍との同居、そして合同実弾演習、基地強化と、思い出すまいどころか、毎日見せつけられて不安な気持ちにさせられます。

そんな今、戦争を知らない人たちへ、あのむごさ、あのみじめさ、あの悲しさを語り継いでいかなければならないと。そして世界のどこででも戦争があってはならないことを、しっかりと考えてもらうために、体験記を書こうということになったわけです。

ところが書き出すと、毎晩のように空襲の夢を見てうなされたり、胸が痛み、涙で眼がかすんで書けないといった状態におちこんだりしました。それがやっと本になりました。それは退婦教をはじめ沖教組等の多くの組織団体、出版社の絶大なる御援助や意気込みに支えられてやっとできあがりました。ここに感謝しながら、この本が、子や孫たちへの語り継ぎの資料となることをお願い致します。

〔編集委員〕

徳田　淡　　宮良　芳　　平敷りつ子　　高尾野タマ
宮里　苗　　石橋　芳子　　外間紀美子　　与儀　春子
知念　春江　　長嶺　春　　富川ハル子　　吉川　文子
神里　ハル　　馬上　好子　　中村田恵子

戦争体験記出版を記念して

退職婦人教職員全国連絡協議会会長　高田　なほ子

我親喰わたる　あぬ戦争
我島喰わたる　あぬ艦砲
生まり変わていん　忘らりゆみ
たーが　あぬじゃま　しいんじゃちやら
恨んでいん、悔やんでいん
子孫末代　遺言さな……

これは昨年七月のことですが、沖縄戦での想像をこえる地獄絵図以上の残酷な〝戦争〟が、どんなにむごいものであったものかを、直接、自分の耳で、心でたしかめなければ信じられないようなけだもの以下の人間、いや軍隊という名に於てなされた惨劇を、涙とともに話して下さった馬上好子さんから、沖縄を去る日、教えていただいた忘れることのできない島の方々すべてのお心を伝えてあまりある民謡の一節でした。

子孫末代まで、語り残し、再びくり返させることを、決して、決して許さないぞーという今は亡き方々の無念は、今日を生きつづける人びとが、しっかりと受けとめなければ成仏なさることはできな

いのだ、と私は肌が冷えるほどに思いつめて、沖縄の地とお別れしました。
全島で平然と敢行した許し難い日本軍の暴虐事件の数々は、あまり詳細には知らされてはいないことを知りました。
軍隊という魔神の正体を明らかにすることなしに、平和を語ることはできない、とさえ私はずっと思いつづけています。
人間の尊厳を守り抜くためにこそ、歴史の真実を伝え、戦争というものが、いかに人間を狂わせ、人類を抹殺しつづけるものかを、すべての人びとに知っていただかねばなりません。
涙を拭い、唇をかみしめ、勇気をもって歴史の真実に迫るみなさまの深い御決意に限りない敬意を表し、平和への偉大な貢献に、最大の拍手をおくって止まない私です。

戦争体験記発刊によせて

沖縄県退職教職員の会会長　船越　清治

戦前戦後と長い間、学校教育一筋に精進して来られた諸先生方が、あのいまわしい戦争の体験記を執筆され、一冊の本として発刊されるということは、最も有意義なことであり、戦争を知らない教え子たちや多くの若い人びとに、深い感銘を与えるものとして、ほんとうに頭の下がる思いがします。
あれから早くも四〇年近くにもなり、悲惨な戦争の記憶が、だんだんと世の人びとの脳裡からうす

らいでいこうとする昨今、国の内外で再びあのいまわしいあやまちが、くり返されようとしている情勢にあることは、日々の新聞の報ずる通りで、ほんとに憂慮に堪えません。とくに、戦争のみじめさを身をもって痛切に味わってきた県民にとって、再びあの悲惨さをくり返させてはならないのです。最愛の夫や、いたいけな乳飲児まで、わが目の前で失わねばならなかった母親の心の中を思う時、戦争のみじめさと悲惨さが一層心にしみ込んでくる思いがします。

台所の片隅で、あるいは、ご家族の寝静まった深夜の居間で、思い出す一こま一こまを、落ちくる涙をこらえながら、一行一行とペンを動かしていかれたであろう先生方のお姿を思い浮かべる時、この尊い「体験記」がどんなに読む者に感動を与えることでしょう。

戦争は、二度と再び起こしてはならない、起こさせてはならないのです。否、「戦争」という言葉や文字すら、この世の中からなくしたいものだと望む者は私一人でしょうか。

諸先生方の貴重なこの一篇が、世の人びと、とくに為政者への警鐘となることを祈ります。

反戦運動、平和教育への最高の贈り物

沖縄県教職員組合中央執行委員長　比屋根（ひやね）　清一

一九一五年頃、ドイツを中心にヨーロッパで、帝国主義戦争に対する反対運動に、婦人団体が時の権力のきびしい検問をくぐって、反戦平和の方針をつらぬき、数多くの反戦平和論集をだしていま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

す。そのうち、『われわれの子どものために』の中に、次のようなドイツの詩人フリドリッヒ・フォン・ローガウの詩をのせています。

戦争とは、何であろうか
骨身にくいこむ悲しみ
すべての財産を荒らす略奪
人の感覚を転倒させる苦悩
生身にのしかかる不幸
不法すら背をむける残酷
これらこそ、戦争が生んだもの。

日本帝国主義の侵略戦争は、日独伊の軍事同盟によって、第二次大戦を拡大させ、世界各国を戦乱のなかに巻き込んで、他国の人民を戦争のいけにえにしました。他国への侵略にも痛みを感じなかった私たちは、当時の大本営発表の誇大された戦勝ニュースを聞いて歓喜し、勝利祝賀に酔った姿を思いだします。その裏で、日本の軍国主義の犠牲になった被侵略国の悲惨な姿に対して罪意識も感じていなかったのです。それは、「神国日本」、「戦争肯定」にもとづく教育が、非科学的、非人間的日本人を育てたからでありましょう。

戦局が一変し、戦況が不利な情勢にあっても、ただひたすらに正義のたたかいと信じて、「鬼畜米英・撃ちてし止まん」などと、戦争指導者の声に躍らされてきました。その結果、沖縄は本土決戦の修羅場になり、県民すべてが、言語に絶する惨劇に遭遇し、奇跡的に生き残った人びとは〝鉄の暴

風〃の様相は、戦後この三九年間忘れることのできないいまわしい戦争の体験であったと思います。

なかでも、文部省や軍部の方針に従い、教え子に国防教育の重要性を説き、その子ども、青年を何の矛盾も感ずることなく〃郷土防衛隊〃〃従軍看護要員〃の学徒隊として送り出した教師の痛恨は、計り知れない。深い悲しみと、誤った教育の恐しさに戦慄を覚えたことでありましょう。

再び過ちを繰り返してはならないという、平和を求める運動が沖縄県内においては、地道に、着実に息づいています。戦争を体験した人びとが「語り部」となり、また「体験記」を発刊するなど、市民運動へと次第に広がりつつあります。しかし、政治の表舞台では戦前回帰の様相が色濃くなりつつあり、防衛力増強が、国会の主要な政治課題となっています。この危険な「軍事力政策」に対して、全体的にみると無批判層が案外多いといわれています。つまり戦争を経験した人びとも、時日の経過とともにその惨劇を忘れ、戦争を道徳的に、もしくは経済的理由によって、国民の生きる道として考える危険性があります。また戦争の惨禍を知らない青少年層は、興味の目をもって戦争を考える誘惑にさらされやすく、右翼的な方向へ流されていく傾向がつくり出されています。

私たちは、このような危機的な事態に対して、より一層、過去の軍国主義教育の過ちを鋭く追求し、「教え子を再び戦場におくるな」の教育実践と、平和運動を発展させなければなりません。

このたび、沖縄県退職教職員の会婦人部の方々のご努力によって、戦争体験記が刊行されますことは、まことに、時宜を得たご計画であり、戦争を知らない教師へ、親へ、そして子どもたちへの最高の贈り物といえます。

再び破滅への道をくり返さないために

沖縄県退職教職員の会婦人部元部長　源　ゆき子

第二次世界大戦で、わが国で唯一の地上戦となり戦禍をこうむった島沖縄。二〇余万人の血によって山河をそめた悲惨な戦争も、時の流れとともに忘れ去られようとしております。

戦後生まれの国民が半数以上となり、敗戦の年に生まれた子どもたちもすでに三八歳を数えるようになり、戦争の悲惨さも風化されつつあります。昭和五五年朝日新聞社が催した「あれから三五年、ひめゆりの乙女たち展」や北海道で開催された沖縄戦の写真展等が大きな反響をよんでおります。文字通り目をおおうばかりの〝鉄の暴風〟、凄惨きわまりなき沖縄戦を見せつける写真、資料の数々、沖縄戦をよみがえらせる展示物に参観の人びとは「二度と戦争はごめんだ」、と真情を吐露する風景でした。直接目から訴える力がいかに大きいかを知らされました。このたび沖縄県退職教職員の会婦人部が退職女教師たちの貴重な戦争体験記を記録としてまとめられました。戦争の悲惨さを体験した方々が高齢化し少なくなりつつあります今日、次の世代のために一人ひとりの戦争体験をまとめておくことは非常に大切であります。

今日の社会風潮は戦争体験の風化どころではなく、軍拡ムードに乗り遅れまいとして、憲法で明確

に否定している戦力の増強に邁進しております。私どもは新たなる戦場への道を突進させられつつあるのではないかと不安になるこの頃です。再び破滅への道をくり返さないためにも意義深い計画だと評価致します。

多くの方々に読んでいただき、沖縄戦の実相を通して戦争とは何か、平和の尊さとは？　を考える資料にしていきたいと思います。

ぶっそうげの花ゆれて／もくじ

発刊のことば――教え子を再び戦場に送るな……平敷りつ子　1
はじめに――編集を終えて……徳田　渙　3
戦争体験記出版を記念して……高田なほ子　5
戦争体験記発刊によせて……船越　清治　6
反戦運動、平和教育への最高の贈り物……比屋根清一　7
再び破滅への道をくり返さないために……源　ゆき子　10

第一章　対馬丸の沈没――学童の疎開

出　発……（与那原町）新里　とみ　20
対馬丸の沈没……（与那原町）富川ハル子　24
生き残りの苦悩……（那覇市）渡慶次ハル　27
戦争は無意味に人を死に至らす……（豊見城村）徳田　渙　33

太郎は父の故里に、花子は母の故里に……（那覇市）　又吉　トヨ　36
集団疎開学童とともに……（西原町）　平敷りつ子　43
疎開船で八日間……（豊見城村）　長嶺　春　51

第二章　御真影を背負って——戦時下の教育

教室も転々として……（名護市）　岸本　ミツ　56
勤労奉仕の日々……（八重山石垣市）　石堂　敏　63
教育勅語を守って……（糸満市）　久保田千代子　65
御真影を背負って……（那覇市）　小橋川カナ　69
御真影奉護隊の夫……（北中城村）　屋比久　和　71
「非国民」という言葉の檻の中で……（沖縄市）　宮良　芳　74
六月がくるたびに（詩）……（名護市）　北城　良子　84

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com